

# 俎原遺跡

—繩文時代中期の環状集落址—

長野県塩尻市俎原遺跡発掘調査概報

1986

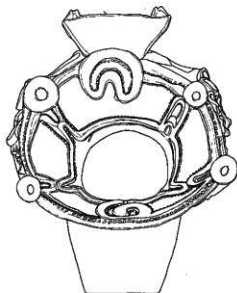
塩尻市教育委員会

まないだ      ばら

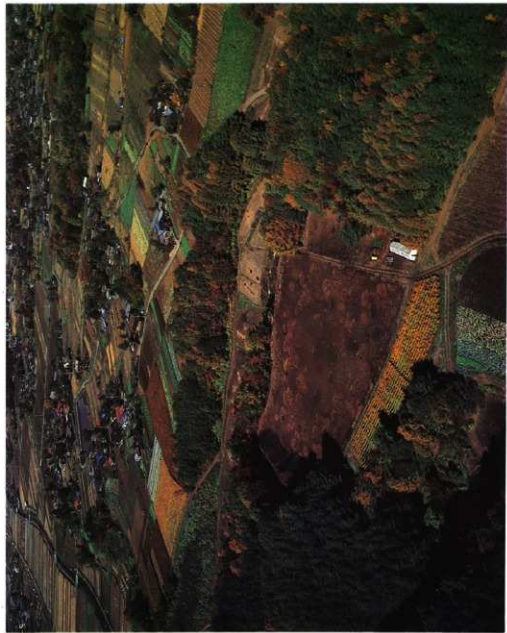
# 俎原遺跡

—縄文時代中期の環状集落址—

長野県塩尻市俎原遺跡発掘調査概報



第70号住居址出土の釣手土器



姫崎瀧部付近の全景（車窓より）

（昭和60年11月2日撮影）

## 例 言

1. 本書は塩尻インター林間工業団地造成事業に伴う、長野県土地開発公社と塩尻市教育委員会との契約に基づいて行われた埴原遺跡発掘調査概報である。
2. 調査経費については長野県土地開発公社からの委託金による。
3. 発掘調査は埴原遺跡発掘調査団（団長 小松克巳氏）に委託し、現場での調査は昭和60年8月30日から12月18日まで行った。
4. 発掘調査団は次のとおりである。  
団 長 小松克巳  
調査員 小林康男、伊東直登、鳥羽嘉彦、市川三三夫、島田哲男。  
調査補助員 前田清彦、三村 洋、五味裕史、山田仁和、腰原典明、奥原俊幸、細口喜則、  
榎川由里子、和田晋治、麗堅 守。
5. 本書の執筆・編集は小林、伊東、鳥羽が行った。
6. 調査にあたり次の方々の御指導、御助言を賜った。記して感謝申し上げたい（敬称略）。  
樋口昇一、丸山敏一郎、桐原 健。
7. 本調査の出土品・誌記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

## 目 次

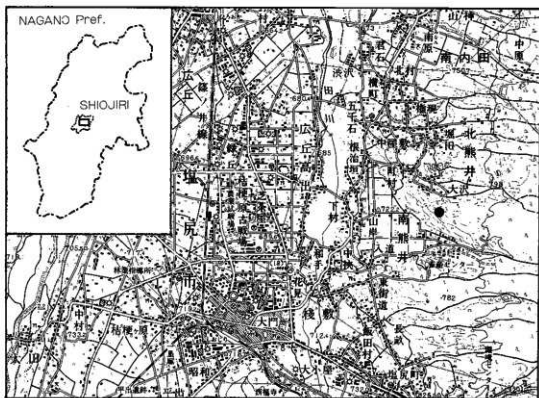
I 遺跡の位置と環境	2
II 調査概要	4
III 縄文時代	6
IV 平安時代	82
V 集落の構成とその変遷	91
1 縄文時代	91
2 平安時代	98
VI ま と め	100

## I 遺跡の位置と環境

廻原遺跡は埴田市大字片丘熊井に所在し、埴田市の東方に南北に延びる片丘丘陵上に位置する。

片丘丘陵は鉢伏川塊（鉢伏山、高ボツチ山、奥山）の西麓斜面に沿って発達した丘陵で、洪積世中頃（約70万年前）に松本盆地南半部で起こった南北性の新層運動によって生じた崖錐性堆積物を基盤とする。埴田市街地東方の小坂田付近から松本市の寿付近まで2km前後の幅を維持して約10kmにわたって延びており、平均勾配は6°と相当急な斜面を西へ向けている。丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。これらの諸河川はいずれも埴原峠に源を発し、丘陵西下を北流している田川にはほぼ直角に流れ込んでいる。

廻原遺跡は、その中の1つである大沢川とその支流にあたる牛亮沢川によって南側と北側をそれぞれ深く崩析された尖頭形の台地上にある。台地中央には大きな窪地帯が台地方向に走っており、遺跡はこの窪地帯と北側の牛亮沢に挟まれた小丘陵上に展開している。この窪地帯に現在、



第1図 廻原遺跡位置図 1:50,000

表流水は流れていないが降雨時には湧水域となり古代においてもかなり湿潤な状態にあったことが推察される。台地下の両河川までは約20mの比高差を有し、遺跡と直接関係ある牛亮沢川側は断崖をもって沢に臨んでいる。現在、長野県畜産試験場が一角に建つ南隣りの台地上には山ノ神遺跡が、また北隣りの台地上には大沢遺跡・中原遺跡といった共に縄文時代中期の遺跡が対峙している。

大沢の谷筋を上り、東山を越えると岡谷市の横河川上流へ下りる。この荷直峠は現在の塩尻峠が開ける以前に利用されていた古道であり、松本平と諏訪盆地を結ぶ重要な交易路となっていたらしい。本遺跡が単に松本平の縁辺部にとどまらず、隣接文化の中継地として、その位置的な重要性を伺い知ることができよう。

## II 調査概要

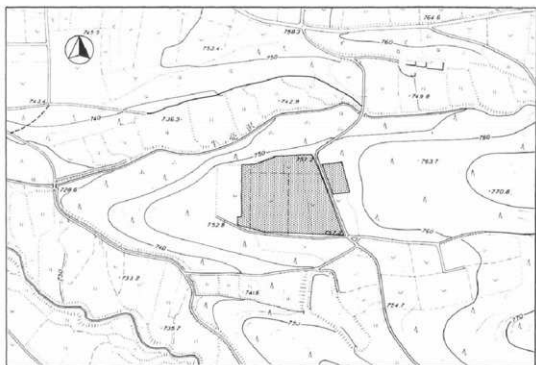
須原遺跡は、多量の表面採集が可能な遺跡として古くから知られていた。過去における発掘調査は1978～80年、松本深志高校地歴会考古班により台地上北側で行なわれ、今回調査のA～C—8～20グリッド区域にほぼ該当し、その結果は1981年、同会による報告書「あせみち30号」で報告されている。今回の発掘調査に先がけた現地踏査においては、多数の縄文時代中期土器片、石器類のほか、土師器片、須恵器片が得られ、複合遺跡であることを得せていた。

調査区は、尖頭形台地上の先端から170m以東、北側の畑地で、重機による表土除去後、西から東へ1～28、北から南へA～Tの4mグリッドを設定し、調査総面積6,700㎡に及んだ。

検出遺構は、縄文時代中期の竪穴住居址147軒、小竪穴169基、平安時代の竪穴住居址19軒で、それぞれの時期における集落形態解明のほか、多くの成果をおさめた。

縄文時代では、東側および西側で調査区域外のため若干の未掘部分を残すものの、東西約100m、南北約80mで、直径40m程の中央広場を持つ環状の集落址が検出された。中期全盛にわたる土器の出土は、これを伴出した遺構の分布調査により中期初頭から最終末にいたる集落の変遷を解明するとともに、松本平における土器編年構成上の一助をなし、供伴する石器類も中部高地該期の組成上典型的な様相を呈しており、中期全盛にわたる変遷をとらえることができた。また、遺構の検出はみられなかつたものの、多量の特殊磨石とともに、少量ではあるが押型文、条痕文の土器片、および前期の踏碇b式、c式土器片が出土し、この台地が、縄文時代早期から中期にいたるまでの、東山山麓における拠点集落であったことが判明した。

平安時代の住居址は、調査区の中央部以南から大部分検出されたが、これについても比較的少ない検出数ではあったものの、やはりその出土遺物によりI期からIV期にかけて数軒ずつのグループがなされることにより、各時期の集落形態とその変遷が看取され、この地域における平安時代山麓集落の様相をとらえることができた。



第2図 調査地区図

0 50 100 m



調査地区の航空写真(北東より)



矢野調査区全観（西岸より）



### Ⅲ 縄文時代



▲17, 45, 111号住居址 (写真中央・南側から) 45号住に貼床がなされ17号住がつくられている。やや浮いた炉が17号住の炉で高く浮いた炉が111号住の炉。北側に98号住が切り合っている。



▶111号住居の炉 東側の炉石は長茅の耕作時に取り除かれたと思われる。

◀17号住居の炉 北側の石は焼けてボロボロになっていた。





▲出土状態 45号住居址出土の藤内Ⅱ式  
大形深鉢。南壁際で出土した。器高  
54.8cm。

▶復元後



▼45号住居 出土の深鉢。  
底部は出土しなかった。



▼45号住居 床面の遺物出土状態。





▲左上から76, 46, 18号住居址と手前44号住居址の切り合い(南側から)。



◀左 44号住居の炉。

◀右 44号住居北東のピット  
内で石柱状の細長い棒が検  
出された。ピットは長径60  
cm、深さ65cm。

▶46号住居址の埋壘  
半截と復元の写真。  
胴部から下がなく、  
中に凹石が入って  
いた。

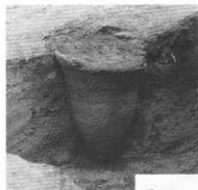




▲76号住居址 入口に埋甕を埋設し、中央やや奥寄りに石甕炉を持つ曾利Ⅳ期の典型的な住居址。奥壁下の床面上に台石が据えられている。



◀(同上) 曾利Ⅳ期の典型的な炉。焚口は手前。



◀(同上) 埋甕埋設状態

▼76号住居出土の深鉢形土器。底部はやや上げ底。

▶埋甕 底部穿孔もない  
光形品で器高31.0cm。





▲19号住居址（南側から）炉石は焚口副が抜き去られていた。

▼炉内に深鉢が完形品で落ち込んでいた。



▲19号住居埋壺 器高  
27.5cmで、底部穿孔  
のない完形品。

▶埋壺埋設状態

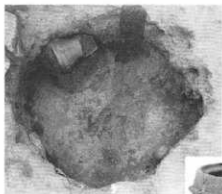


▼炉内出土土器





▲20号住居址（南側から） 直径6.1mを計る比較的大きな住居址であった。



▲（同上） 炉西側の小竈穴から打斧、凹石とともに底部の欠けた曾利Ⅲ式深鉢が出土した。住居廃棄後の小竈穴と思われる。



▲（同上） 石田炉の一部は長手の耕作による抜去も考えられるものの、明らかに当時の人為的抜去の跡も残されている。

▶（同上）小竈穴出土の深鉢。





▲40号住居址（手前）と、その奥左から48、21、39号住居址の切り合いを南側からみる。



▲39号住居出土深鉢。  
器高27.5cm



◀40号住居出土深鉢。  
器高26.5cm



▲48号住居埋葬  
完形品が正位で  
埋設されていた。

▶48号住居連炉 長手の耕作により西側半分の炉石は抜かれている。





▲22号住居址（南側から） 手前に蓋付きの埋篋があるが、その手前39号住居に貼床をして埋設してあった。

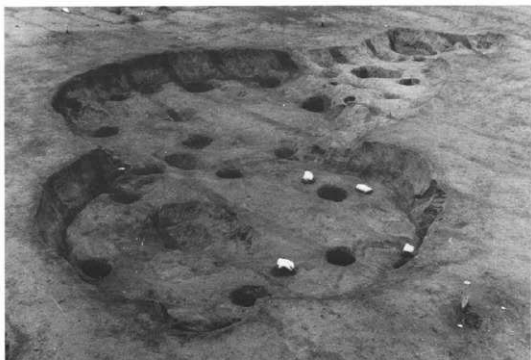


▲（同上）埋篋部分。今回の調査で石蓋付きの埋篋は、本址と36号住居の2例だけがあった。



▶（同上）埋篋器高38.3cm。底部穿孔のない完形品。





▲手前54号，その奥23号，右奥138号の各住居址を南西方向からみる。  
中央広場北西側に面して3軒が切り合って検出された。



▲54号住居址（南東側から） 手前に壁隅が埋設され，炉石はすべて除去されている。写真一番左の柱穴内に深鉢口縁部が落ち込んでいた。



◀64号住居柱穴内に落ち込んでいた曾利Ⅱ式の深鉢形土器。

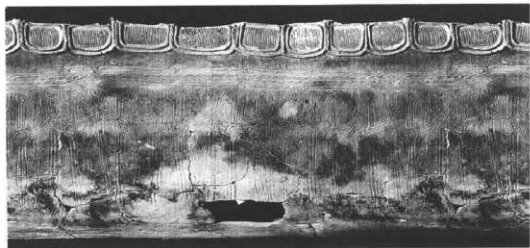
▼64号住居埋篋埋設状態。



▼64号住居埋篋 器高45.1cmの完形品。口縁部文様帯と胴部文様帯が、このような組み合わせをもった土器は、松本平では珍しい。



▼(同上) 埋篋展開写真



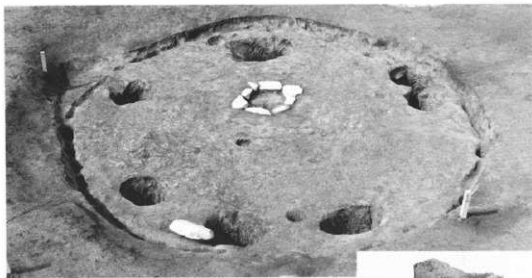


▲23号住居址（南側から）奥壁に寄った炉は、炉石がすべて除去されていた。入口部分に埴甕が埋設されている。

▼23号住居出土の小型約手土器。器高12.5cm



▲（上）曾利Ⅲ式の埴甕 底部まで完存し、器高33.0cmを計る。



▲25号住居址（東側から）遺存状態のよい曾利I式期の住居。掘り込みは浅く、5本柱穴をもち中央やや西寄りに平石を横に並べた石囲炉を設けている。手前（中広層前）に立石が横倒しになっている。



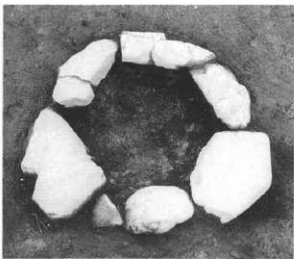
▶25号住居出土の口縁部を欠いた曾利I式土器。現存高19.5cm。



▲左から42号、41号住居址（西側から）長茅と後世の掘乱が著しい。



▲24号住居址（手前炉の住居址）と、本址に大部分切られて右上隅に一段高く135号住居址。床面上広範囲に焼土がみとめられ、焼失家屋の可能性が高い。（北側から）



▲24号住居の石囲炉。上面が平らな石を横たえて炉としている。左右の大きな石は、ドンブリやトチの殻を割るときにの台石としたのかも知れない。

▼24号住居出土の高さ13.3 cmの小型土器。





▲現存高29.3cm。着手で焼がよい。



▲現存高20.8cm。

▼器高29.7cm。把手がダイナミックである。



24号住居址の床面上やや浮いた所から吹上パターン状態で出土した土器の一部。

▼現存高14.0cm。格子目文が美しい。





▲27号住居址 大きな石を縦に組んだ推辺の深い巨大な石囲炉を持つ。右手壁際に土甕。  
 (西側から)



◀27号住居産物埋設状態 埋設時の  
 掘り方は壺に合わせている。



▶27号住居埋壺 口縁部と胴下半部  
 を欠く唐草文系の土器。



▲左手28号住居址を手前29号住居址が切っている。29号住居は360×340cmの小型住居址。  
(南側から)

▶29号住居の縄文Ⅱ式期の典型的な小型石甕炊。



◀29号住居出土の口縁部を欠く甕形土器。





▲手前に大型の30号住居址と上方に31号住居址（北側から）長芋の掘削の跡が無残。



◀30号住居床面上から出土した、ほぼ完形の土器。

▶30号住居出土の推定製元器高34.5cmの大型深鉢形土器。



▶36号住居埋藏 胴下半部を正位に埋設。  
底部完存。高さ32.5cm。石蓋あり。



▼上方から35,36,37号住居址と中央36号住居址右手に38号住居址。35,36,37号住居址とも炉石が抜去され、37号住居址には平石が据えられている。(西側から)



▼37号住居埋藏 左は底部欠如  
で高さ26.5cm。右は底部のみ  
9.5cm。



▲37号住居埋藏半截 埋藏取上げ  
げ時、脇にもう1個体の埋藏  
底部が発見された。



▲中央33号住居址と上方に32号住居址。33号住居址右手に34号住居址が切り合っている。(西側から)



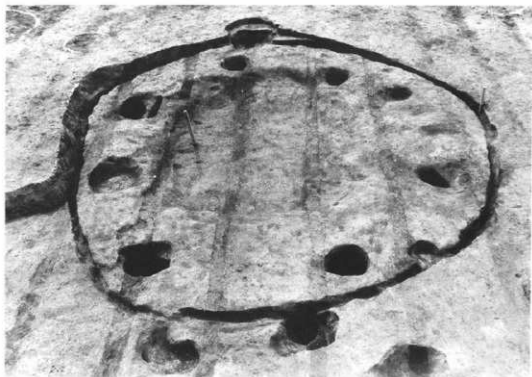
◀32号住居土器出土状態。

▼32号住居埋罐。正位で  
胴下半部が埋設。底部  
完存。高さ20.5cm。



◀33号住居埋罐  
正位で底部  
だけが埋設され  
ていた。  
高さ9.5cm。



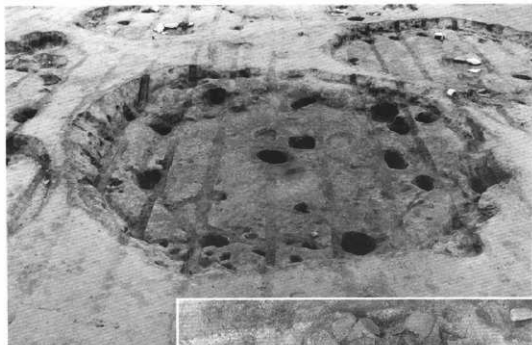


▲34号住居址（北側から）

径5.6mの隅がやや角ばった円形プランの住居の中央に3.52×2.87m、深さ20cmの大きな掘り込みを持った住居。掘り込みを中心として8本の柱穴が配列された特異な住居。



▶34号住居出土土器 内側落ち込みの壁にかがって出土した。



▲中央同心円上に43号(外)  
64号(内),その上方に66号,  
43号上部に粘床の65号の  
名住居址。(北南から)



▲64号住居 多量の土器が床面上に折り  
重なるように投げ捨てられていた。



◀43号住居から出土した胴上半部の土偶高  
さ7.5cm。両手に前後に穿たれた孔がある。



〈43, 64号住居出土土器〉

1. 43号住居。高さ9.0cm  
 2. ~5. 64号住居址高さは、  
 2. 推定高29.5cm 3. 現存高22.5cm  
 4. 現存高27.0cm 5. 推定高22.5cm





▲中央47号住居址と右手下に154号住居址が切られている。(南側から)47号住居は掘込みの深い炉だが石はすべて除去されている。台石と煙竈がみえる。



▲47号住居出土の約手土器。床上に底を上にして押しつぶされたような形で出土した。推定高18.5cm。中は煤で黒くなっている。



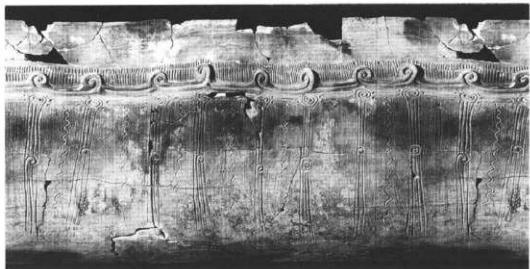
▶47号住居埋甕埋設状態。  
口縁部が床面と同じ高さになるように正位に埋められている。



◀同上 埋 甕

高さ53.1cmの唐草文系統の大形土器を使用している。底は完存している。粗原では、甕が完存した土器を、正位に埋め込んだ埋甕が一般的であった。

▼同上埋甕展開写真 4単位の文様構成がよく分かる。

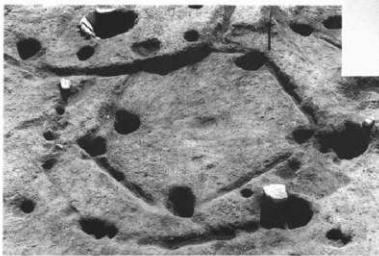






▲手前107号住居址に切り合って上方に右から49号(下写真)、106号、105号、104号の各住居址を北西側からみる。107号住居は大きな石を組み合わせた石囲炉を持ち、一部抜去されている。

▼49号、106号住居址。49号住居は、5本の主柱穴を溝が直線に結ぶ特異な構造を持った住居。他に53号、114号、120号の跡列があった。



▲107号住居出土の曾利Ⅱ式土器。高さ24.3cm。



▲手前左から158, 110, 75, 上方に109, 108, 50号の各住居址 (南西側から)



▲中央から50号, 108号, 109号住居址。(東南側から) 左手に109号住居の石田埋燵が。



▲109号住居の埋燵が。口縁部だけ埋設されていた。



▶50号住居  
石田燵

▶50号住居から出土した藤内工式深鉢形土器。胴下半部を欠き、現存高17cm。



▼50号住居器台出土状態 床からやや汚れた状態で出土した。



▲50号住居出土の器台 高さ5.2cm。



▲50号住居出土の藤内工式土器  
現存高18.2cm。

▶75号住居出土の曾利Ⅲ式土器 高さ20cm。





▶59号住居出土の曾利I式深鉢形土器 隆帯を主体とした文様構成が美しく、古代人の力強さが伝わってくる。現存高28cm。

◀108号住居から出土した土偶胸部の出土状態。巾7.7cm。



▼手前59号住居址と左手上方に60,61号住居址（西側から）。59号住居は6本柱で、建替をしたことがみとめられる。右手に台石が2つ懸えられている。





▲51号住居出土土器 高さ：左26.7cm、右34.8cm。抽象文がおもしろい。

▼51号住居址（南側より）中央が51号で、左を52号、右を10号住居に切られている。炉石を抜き去った大きな炉があり、北壁際には上面が平らな機がすえられていた。



▼52号住居出土釣手土器  
北側床面上に横倒しになって出土した。中には煤の付着した凹石が入っていた。高さ29.5cm。



▲52号住居址（南側から） 5.60×5.60mの円形の住居で、5本主柱をもつ。北壁に寄って大きな石皿炉が設けられているが、炉石は住居廃棄時に除去されてしまっている。

▼53号住居址（南側から） 右半分を52号に切られている。主柱穴間に溝を走らせた特異な住居。



▼53号住居出土土器  
高さ23.9cm。





▲55・83号住居址（西側から）中央の55号に6本主柱で、中央に小形石囲炉をもった新道期を代表する住居である。左手にわざわざ館をみせているのが88号住居。



▲55号住居の石囲炉 小さな線を五角形に組み合わせた炉で、掘り込みは浅い。

▼83号住居埋篋炉 筒下半部を輪切りにして使用している。



55号住居址土器出土状態  
住居内中央から南壁にかけて集中  
的に出土した完形・半完形の土器  
群。

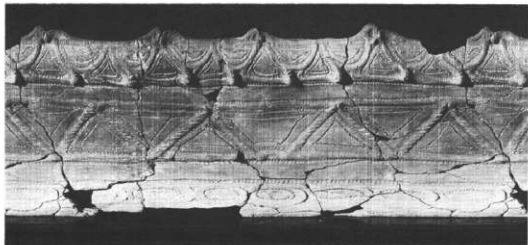




55号住居址出土土器 新道期のすばらしい一括土器群  
 高さ 1.20.7cm 2.28.7cm 3.15.4cm 4.30.0cm



1	3
2	4
5	





▲56,141号住居址(西側から) 中央から56号で、斜左に竪状にわずかにみえるのが141号。多くの柱穴があるのは2軒分のためか。56号では多くの半完形土器や土偶が出土した。



▲56号住居出土土器 高さ18.7cm



▲同左 松本平には珍しい大木系の大形土器。高さ68.5cm。

- ▶ 58号住居の西よりから埋設状態で発見された土器。後の時期に埋め込まれたものと思われる。



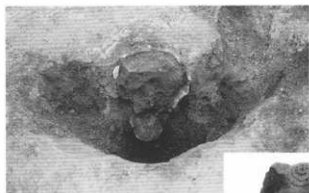
- ◀ 58号住居炉址 炉中央に土器上半部を埋め込み、回りを糠でとり囲んだ石田埋焼炉。手前半分が長手耕作によって失われてしまっている。

- ▼ 手前57号住居 右奥58号住居址（埋焼から）  
57号は埋焼炉、58号は石田埋焼炉を設置





▲手前の63号住居址から上方左手へ順次62、124、119、118号の各住居址を北側から見る。63号住居は大きな石を組んだ掘り込みの深い巨大な石囲炉を持つが、長手の耕作機による抜去がはっきりうかがえる。炉上方に埋藏が見える。



▲63号住居埋藏半截状態 長手の耕作機により前部半分は破壊されていたが、底部だけはまぬがれ、残されていた。

▶同上埋藏前部





▲手前86号住居址 その左手に67号住居址、上方に同心円  
 円で内周68号、外周69号の各住居址（西側から）。86号住  
 居は西い床面が検出されたものの、柱穴が検出されな  
 かった。69号住居右手に台石。



▲86号住居の石囲炉 一部に土器片  
 を組み合わせて使用している。



◀68号住居出土の曾利Ⅱ式土器。  
 器高25.8cm。



◀70号住居出土釣手土器 高さ32.9cmの大形器で、釣手頭部にラッパ状の飾装をつけ、釣手部分には円を主体とした文様を付した豪華な土器。

▼釣手土器出土状態 東壁下の床面直上に正位の状態で出土した。



▼70号住居址（西側から）奥壁（東壁）下に釣手土器がみえる。



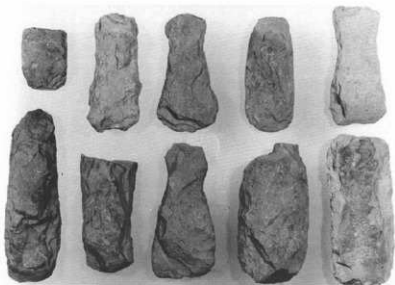


▲70号住居址（西側から）

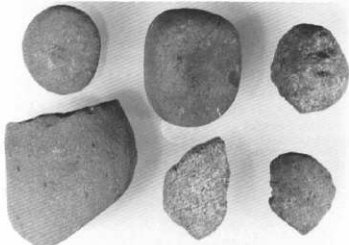
6本主柱、石田炉の住居で、奥よりには後に掘り込まれた小竪穴がみえる。土偶、釣手土器、有孔罎付土器など祭祀に関連した多くの遺物が出土している。右手には、本址に切られた71号住居址がわずかに顔をみせている。



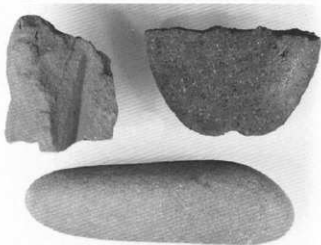
◀70号住居出土の有孔罎付土器  
胴上半部に内形を主とした文様を配した華麗な土器で、全面赤褐色を呈し、よく研磨され製作に特別な配慮が払われている。



◀70号住居出  
土石器  
打製石斧類



◀同上  
凹石、磨石



◀同上  
砥石、石皿、  
敲石





▲72号住居出土の深鉢形土器



▲73号住居出土土器

▼中央72号住居址 右手上方から151,74,73号住居址が切り合っている。72号住居は、壁高65cmを計る比較的深く掘られた住居址である。





▲中央左手152号住居址 右手77号住居址 (北側から)



◀152号住居石囲炉  
平らな石を並べ  
て作られ、中心  
に小さな窪み  
がある。

▶78号住居出土の縄内Ⅱ式期の土器



▼中央78号住居址と右手に切られて153号住居址 (西方)





▲79号住居址（南西側から） 直径5.50×5.40m円形プランの  
曾利Ⅱ式用住居。炉石はほとんど抜去されていた。

▶123号住居の石囲炉



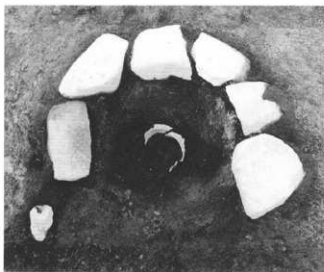
▼中央の炉を持つ住居が123号住居址。その上方にわずかな壁  
の立ち上りをみせて81号住居址（西側から）





▲80,125号住居址（南東側から）中央の石囲埋竈炉のあるのが80号、手前80号に大半を切られ、わずかに瓢状に残されているのが125号。

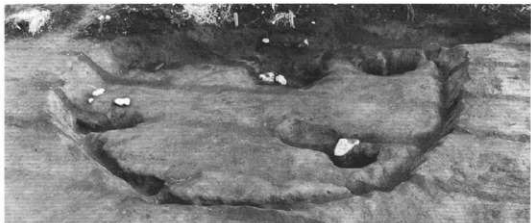
▶80号住居址復土出土土器



▲80号住居址石囲埋竈炉 手前は長草により攪乱。



▲炉に埋められていた土器  
高さ20.3cm



▲82号住居址（西側から）東側は道路下のため未掘。手前に埋甕が、北壁下に石皿がみえる。



▲西埋甕埋股状甕 高さ54cmの完形・大形の甕が正位に埋設されていた。



▲同 埋 甕



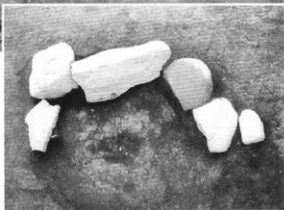
▲床面上から石皿と磨石とガセットで出土した。



▲82号住居出土土器

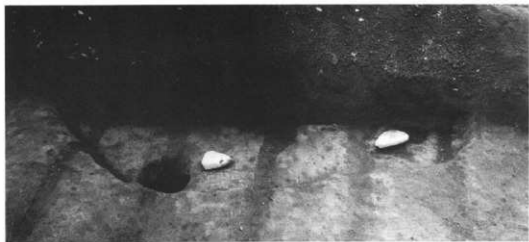


▲左手から87,84号住居址（北側から）。  
残念ながら半分は調査区外であったが、  
集落がもつと南へ広がることを示した住  
居の1つである。



▶84号住居の石遊炉 半分は長手  
の耕作によると思われる。

▼85号住居址（北側から） 上と同じく、半分以上が調査区域外であった。





▲88, 90, 91, 130, 142号住居址（西側から）一番手前が142号、その奥で石囲炉のある住居が88号、さらに奥で壁に立石が倒れているのが90号、90号の右手が91号で、88号の右手が130号。



▲89号住居址（東側から）中央に小さな石囲炉をもち、床上には平石が置かれている。



◀90号住居埋藏  
埋藏は、口縁部を  
わずかに欠くだけ  
の土器を正位に埋  
めている。その中  
には、小さな土器  
が横に入れられて  
いた。高さ、埋藏  
25cm、入れてあつ  
た土器11cm。

▶90号住居址出土石器  
打製石斧類。短冊形  
を主とするが、形の  
整わないものも多い。



▶同上。凹石、石匙、  
磨製石斧、石錘。凹  
石は磨石と兼用する  
ものが多い。







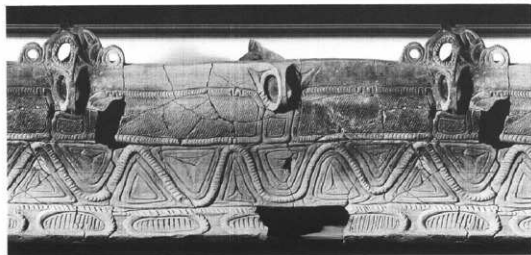
◀81号住居址器台出土状態

▼同上 器台  
完形のものは珍らしい。



◀88号住居址土器出土状態  
豪華な把手を付し、胴下半には  
三角形を主体とした文様を配した  
縄文中期土器の逸品。高さ47.9  
cm。

▼同上 土器展開写真





88号住居址出土土器 鉢面よりやや浮いて重なり合うように豪華な土器が多量に出土した。

1	2
3	4
5	6



- 高さ
1. 47.9cm
  2. 30.5cm
  3. 38.5cm
  4. 29.4cm
  5. 23.4cm
  6. 22.0cm



▲手前中央に92号、方向に左から126、127、128号の各住居址（西側から）。

▶126号住居の炉石が持ち去られた炉から押しつぶれた形で出土した曾利V式深鉢形土器。



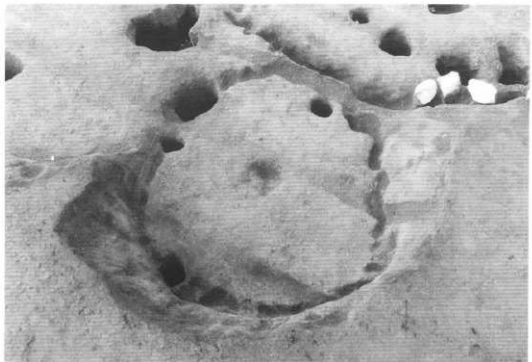
▲炉内出土土器の復元後 底部はなく、現存高20cm。



▲128号住居埋藏 正位で埋設され底部まで完存。高さ19.4cm。



▲83号住居址（西側から）南側を平安7号住居に切られ、炉の中央を長芋の耕作機が通っている。



▲97号住居址（東側から）2.5×2.5mの最小規模住居だった。



▲84号住居址（北側から）床面はあまり堅くなかった。



▲手前から95, 96, 112号の各住居址（北側から）後世の擾乱が著しい。



▲100号住居址 多数のピットにより床面の凹凸が著しい。炉は中央に僅かな廻り込みがみられる。



▲100号住居址 出土土器 高さ共に20cm。



◀88号住居址出土土器  
高さ42cm。

▼左からそれぞれ高さ32cm, 22cm, 18cm。



▲88号住居址（北西から）中央の石垣坑は99号住居（左手）によって半損している。



▲99号住居址出土埋甕 高さ21cm。



▲(同左) 石囲い炉 南側の石が抜去されている。



▲99号住居址 小規模な住居であるのにカかわらず大型炉を用いている。





▲101号住居址（手前）と155号住居址（左奥） 101号住居の炉は掘り込みの深い大型炉であるが石は除去されている。床面の凹凸が著しい。

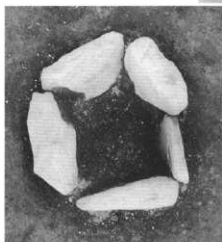


◀（同上）埴甕 口縁部を欠損している。  
高さ26cm。

▶101号住居址出土土器  
高さ24cm（左）、15cm（右）



▶102号住居址出土土器  
高さ32cm(左)と22cm(右)



◀102号住居址炉

▼102号住居址全景

中央の小型石囲炉と4本支柱穴をもち非常に整った形をとる。向こうの切合いは小竪穴。

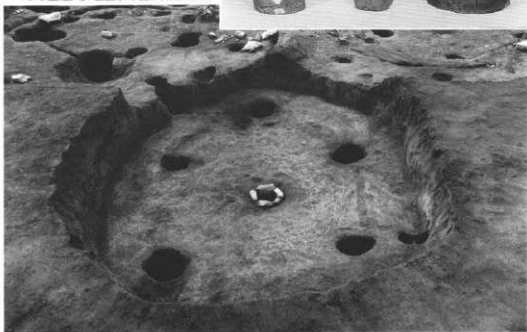




103号住居址出土土器  
 高さ56cm(上), 49cm(上右)  
 左から23cm, 19cm, 13cm(右)

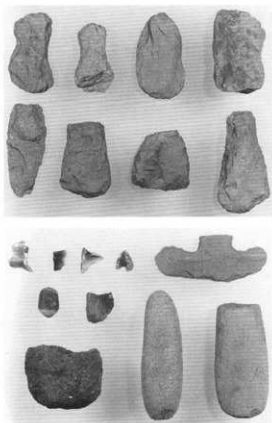


▼103号住居址(北から)  
 5本支柱穴、石囲炉の笥沢期住居址。



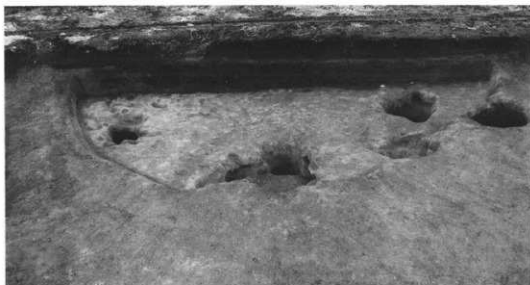


▲113号住居址(外側)と114号住居址(内側) 114号住居は六角形の凹溝をもつ。  
狭くなつたためか、拡張し113号住居をつくっている(西側から)。



▲114号住居址出土土器  
高さ17.5cm。

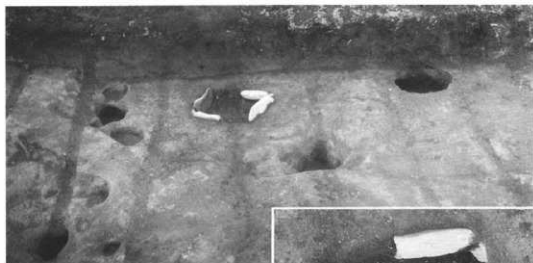
◀同上出土石器  
打製石斧、スクレイパー、  
石錐、大型石鏝、石皿、  
敲石、磨製石斧



▲115号住居址（西から） 道路にかかり西側半分を確認するにとまった。

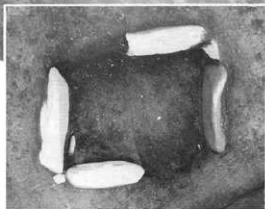


▲117号住居址（東から） 床面の凹凸が激しい。手前の落ち込みは小竈穴。



▲129号住居址（北側から）大きな石を使用した四角い石囲炉の中央を長芋の耕作が入り、石が除去されている。

▶（同上）石囲炉 向かい合わせの一方は平らな巨石を立てて使い、他方は細長い石の平らな面を上にして組み合わせてある。



▲122号住居址（東側から）上方は平安時代16号住居。中央に石囲炉が半分残っている。



▲120号住居址土器出土状態 住居間中央を中心として完形・半完形の土器が多数に出土。縄文期のすばらしい一括資料の発見であった。



▲120号出土土器 右のような出土状態の土器を復元すると左のようなすばらしい土器が姿を現わした。高さ、上21.0cm、下20.0cm。

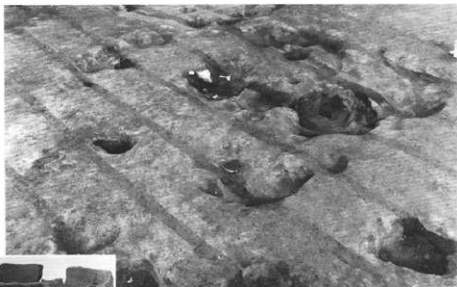


▲120号住居址（北西麻から） 多層の土層を取り除くと、四本支柱を納ぶ溝のある特異な住居が露をみせた。一本の支柱わきには上面が平らな石が床にすえられていた。



▲121号住居址（南麻から） 3.1×3.0mの小さな縄文期の住居で、中央に石囲炉をもつ。





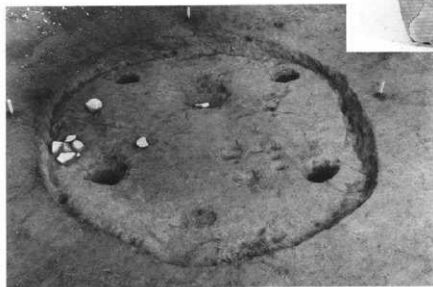
▲131号住居址（物西面から）手前に埋甕が埋設されている。



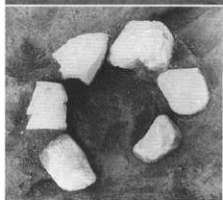
◀同上埋甕 底部完存  
正位。高さ19.5cm, 中  
に焼が1個入っていた。



▶148号住居埋甕 正位  
で底部まで完存。高さ  
34.5cm。



▲148号住居址（物西面から）炉石はすべて抜去され、手前に埋甕が埋設されている。



▲(同上) 石囲炉 炉石の1つは平安時代に抜かれたのかもしれない。

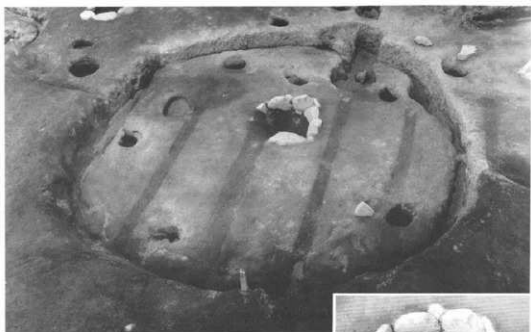


▲右手平安の11号住居に切られた132号住居址  
(南側から)

◀132号住居出土の土鈴  
直径2.5cmの小さなもの



▲手前133号住居址 奥に134号住居址 (奥側から)



▲136号住居（南側から）中央からやや北寄りに石囲炉がある。焚口に平らで大きな石を用い、囲りに大きな石を縦に組んで作られた大きな炉である。



▶136号住居石囲炉 長芋の耕作機が、ちょうど炉の左中はまて入ってとまっている様子がよくわかる。



◀手前139号住居址 その上方に140号作居址。（西側から）、北側を平安時代の4号住居に切られている。後世の掘削が著しい。



▲中央137号住居址と右上に162号住居址の跡跡が出ているが、調査区域外のため未掘。手前に埋篋が埋設されている。(西方)

▶137号住居埋篋正位で埋設され底部まで完存。高さ57.6cm。



▼146号住居出土土器



▼146号住居出土土器



▼146号住居址(東方)大部分調査区域外であったが、大量の土器が出土した。





▲145号住居出土の顔面把手付土器 土偶のような表情をし、胸部まである。高さ28.0cm。

▼手前の石田炉が143号住居址 その上方が145号住居址、143号住居右手が144号住居址。3軒ともほとんど同一レベルで検出された。143、145号の炉半分は長茅の耕作による。





▲147号住居址（南側より）手前入口部に埋篋が設けられ、奥壁よりに炉石が抜かれた炉がある。4本支柱のやや隅丸方形形状を呈する住居。



◀同、埋篋 底まである胴下半分を正位に埋篋。  
高さ34.5cm。

▶同住居址出土土器  
高さ15.0cm。

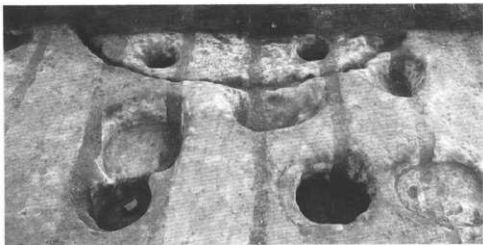


▼同住居出土土篋 中には小石が入っていた。





▲156号住居址（北側から） 中央上の貯床だけが残存。柱穴8本と思われる。



▲157号住居址と小貯穴（北側から）



▲161号住居址（東側から）



▲149号住居址（南西側から）

▶149号住居の石囲煙燻炉  
大きな石を組んだ中央に  
小さな土器が埋設されて  
いる。



◀150号住居の石囲炉  
一方に土器片が使用さ  
れている。



▲150号住居址（北側から） 右手下に石皿が床上に伏せられている。